

# 福永光展

## ホッケーのために、 小矢部のために。



今回で紹介するのは、いならば農協西部支店で営農指導員をしている福永光展さん。いかに農家さんにいいお米や野菜を作ってもらえるか、家庭菜園などの園芸の指導も行っ。

「去年の十一月に西部支店に異動となり、生まれ育った地区の農家さんの支援をしています。」

毎年、天気や気温が同じではないので、その年の気候に合わせて指導を行う。

「農業以外の仕事を持ち休日に畑をされている方は、なかなか畑の管理に本腰を入れてやるのが難しい。そんな時のお手伝いが、僕らの仕事です。」

伝統的な田んぼや畑のやり方は、裏付けがあつての話。結果のプロセスは、みんな知らない。何でこの育て方で、こんな結果がでるのか…。

「経験で言えは、もちろん農家さんのほうが上なんです。」

その結果を研究してある程度裏付けすることで、たくさんの方に話ができる。



農家さんと顔を合わせ、触れ合う機会が多い。

「今は小学生が田植え体験をする授業がありそのお手伝いもします。県外の方が参加しに來られることもありますよ。」

実は、福永さんは、母校でもある石動小学校のホッケーも指導されている。

「ホッケーを教えていて思うのは、今時の小学生はませている、自分勝手だという話は聞くが、自分たちの子どもは頃と何も変わらない。」

「与えられている物や環境は昔と明らかに違うが、試合前のウォーミングアップに鬼ごっこをさせると、無邪気に楽しんでやっています。」

福永さんは、小学生の時にホッケーを始め、高校までずっと石動でホッケーを続け

た。

「ぼくらの世代が、石動高校ホッケー部始まって以来成績が悪い時代でした。今までインターハイ、国体、全国大会のどれかに必ず行つてきたのに、3つとも行けなかった。」

「ああ、ホッケーをこのまま続けることができないな…。」

そんな気持ちの中、避けるようにホッケー部がない大学を選んで進学。

たまたま就職で、いならば農協に決まり小矢部に戻ってきた。営業エリアで、当時小学生を教えていた高田さんと出会い、母校のホッケー部を教えてほしいと誘われた。

「ホッケーを教えるのは難しいです。まずホッケー競技自体が難しい。」

メジャーなスポーツと違い、指導するための専門的な本やマニュアルが無い。

「他のスポーツ競技の指導本をいろいろ見て参考にします。」

「まずは体の使い方を覚えさせること。特に基礎の技術を教えることを考えています。」

習い始めの子ども達と、高学年の子ども達の練習方法も変えなければならぬ。また、いろいろ工夫をしなければ、飽きてしまう。

昔と違い練習時間は相当少なくなつた。また、授業中にホッケーをすることもなくなつた。

短い時間でクオリティの高い練習をするには、指導者側のスキルアップと時間の確保が欠かせない。今より一歩広がった全体的な視点での持続可能な仕組みが必要

な気がした。

「全国一位になれるものならなつてみたい。」

小矢部はホッケーの街である。

■福永 光展

昭和54年9月18日

土日をほとんどホッケーを教えることに利用。休むのは冠婚葬祭ぐらい。ホッケーの指導はボランティアだが、自分を成長させてくれる多くの財産をいただける。